様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　６月２０日現在

研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2006-2008
課題番号：１８５２０２４１
研究課題名（和文）　カナダ先住民文学・アジア系カナダ文学にみられる「グローカル」性の考察
研究課題名（英文）　Glocal identities in Native Canadian Literature and Asian Canadian Literature

研究代表者
佐藤　アヤ子（SATO AYAKO）
明治学院大学・教養教育センター・教授
研究者番号：７０１３９４６８

研究成果の概要：
Identity Politics が声高に叫ばれていた 90 年代、マイノリティ作家と呼ばれていたカナダ先住民作家及びアジア系カナダ人作家の文学をグローバルとローカルを融合させた「グローカル」性という新しい概念で分析した。白人優勢の社会で、従来の支配者、被支配者という二元的な構図で創作するのではなく、彼らの作品が、グローバルに普遍なるものへの同化と同時に、自らの出自である母語や伝統的なローカル文化を作品の中に取り入れ、個別と普遍を融合させた「グローカル」性という新しい文学理念に向かっていることに注目した。この分析法は、内外においても本研究が初めてであり、新しい文学分析として今後活用されよう。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	900,000	0	900,000
２００７年度	600,000	180,000	780,000
２００８年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	2,000,000	330,000	2,330,000

研究分野：英米・英語圏文学
科研費の分科・細目：英語圏文学
キーワード：グローカル性、グローカル・アイデンティティ、グローカリゼーション、グローカリズム、トムソン・ハイウエイ、ヒロミ・ゴトー、ロイ・ミキ、ラリッサ・ライ

１．研究開始当初の背景

グローバル（地球規模）とローカル（地域）の二つの視点を共に重視する考え方が、昨今注目され始めている。この二つの言葉からの造語である、「グローカル」（glocal）性を今日のカナダ先住民文学、アジア系カナダ文学に検証するのが動機である。

２．研究の目的

グローバル（global）とローカル（local）を融合させた「グローカリズム」や「グローカリゼイション」現象は、国境を越えた地球規模の視野と草の根の地域の視点で様々な問題を捉えていこうとする考え方である。この理念は、昨今の環境保護活動、高度情報社

会での IT 推進策のために日本で活用され出したのが始まりである。そして、現代社会が抱える様々な問題解決のために、グローバル（地球的視野）だけでも、ローカル（地域草の根的視野）だけでもない、両方の視野を持って双方向的に行動しようという傾向が様々な分野でみられるようになっている。今日のカナダの先住民作家、マイノリティ作家と呼ばれてきた非白人系作家たちの文学のなかにもこの「グローカル」性が見られるのではないだろうか。この新しい視野に立った日本発の文化発信「グローカル」性を、カナダ先住民作家や、新移住者といわれる 60 年代後半以降カナダに移民したアジア系カナダ人作家たちの文学に探り、新しい分析理論で現代カナダ文学を考察するのが本研究の目的である。

３．研究の方法

（１）日系カナダ文学、アジア系カナダ文学の権威であるサイモン・フレーザー大学の Roy Miki 教授を訪問して、日系及びアジア系カナダ人作家の最新の文学動向に関する専門知識の提供を受け、日系及びアジア系カナダ文学に見られる「グローカル」性について意見交換をはかり、示唆を受けた。

（２）日系カナダ人作家 Hiromi Goto にインタビューをした。代表作である *Chorus of Mushrooms* で、ゴトーは主人公の「語り」に日本語を取り入れる手法を用いている。ゴトーの「narrative strategies」がグローバルとローカルなものを融合した「グローカル」性であることを指摘して、作者ゴトーと意見交換をした。

（３）バンクーバー在住の新移住者であり、心理学者でもある中国系作家の Lydia Kwa 氏を訪問して、インタビューを行ない、意見交換を図った。また、カリフォルニアからの新移住者で、ブリティッシュ・コロンビア大学講師の中国系４世作家 Larissa Lai 氏を訪れてインタビューを行い、意見交換を図った。両氏はグローバル化とローカル化を踏まえた新しい視野に立ってニュー・アイデンティティを構築しようとしている若い作家たちである。

（４）トロント在住の日系作家 Kerri Sakamoto を訪れ、彼女の小説 *The Electrical Field* に現れる「グローカル」性の問題について意見交換した。

（５）Rui Umezawa、Sally Ito などの新しい日系作家たちとのインタビューも図った。

（６）Waterloo 大学の Tristanne Connolly 教授、カナダ文学の大家である British Columbia 大学の Richard Cavell 教授を訪問して、カナダ先住民作家について意見交換した。Tomson Highway の作品にみるグローカル性についての意見交換は大変有意義であった。

（７）Roy Miki 教授、Richard Cavell 教授、Beverley Curran 教授、Hiromi Goto、Larissa Lai などの作家を招聘して本務校でシンポジウム「グローバル化時代の文化・文学の未来を検証する」を開催した。Cavell 氏の「マクルーハン、グローカリズムとカナダ文学」の講演は本研究にとって大変有意義であった。

４．研究成果

（１）明治学院大学国際平和研究所主催シンポジウム（2009 年 1 月 31 日）「グローバル化と多民族共生」で、カナダ先住民作家 Tomson Highway（1951－）の戯曲 *Dry Lips Oughta Move To Kapuskasing*（『ドライリップスなんてカプスケイシングに追っ払っちまえ』）（1989）を取り上げて、「カナダ先住民文学にみる〈グローカル性〉」を発表した。本発表は、カナダ先住民の作品をグローカル・アイデンティティの見地から分析した初めてのもので、会場からも注目を集めた。

1492 年のコロンブス一行による北米大陸到来によって、「ドラスティックでトラウマティックなことが起こった」とハイウェイは批判する。カナダはアメリカ同様イギリスや他のヨーロッパの列強が先住民の土地を植民地として略奪して建国された。以来、新天地を求めてヨーロッパから離散したディアスポラたちが、先住民たちを迫害し、ホームランドにいながら先住民を居留地に囲い込み、ディアスポラ化した歴史がある。先住民たちは悪名高き「白人同化策」という名目のもとに、インディアン文化の絶滅を強いられ、子供たちはカトリック教会運営の寄宿学校に入れられてキリスト教主義による洗脳教育を強制されてきた。

このような歴史的背景をもとに、従来、先住民作家たちは、支配者・被支配者という二元的な構成で、悲劇的存在として先住民を描いてきた。しかしハイウェイは本作品で、インディアン神話およびインディアン文化の象徴で、かつジェンダーを超越した存在のトリックスターを登場させて、父なる神を崇める一神教のキリスト教が作り上げた家父長制的世界に挑戦するとともに、一層のグローバル化によって二十一世紀には消滅してしまう恐れがあるローカルなインディアン文

化とインディアン語を復活させることによって、グローバルとローカルなものの共生を「グローカル」という形態で展開している。これは、民族そのものの存続をはかろうとする先住民作家の切ないほどの願いでもある。本発表は、グローバル化・植民地化・移住者・多民族との共生が行われてきたカナダにおいて、文学においてどのような変容が起きたかを「グローカル・アイデンティティ」の概念で分析した内外でも例を見ない作品分析である。

この発表は『PRIME』に掲載される。

（2）第２７回日本カナダ文学会年次研究大会（2009 年 6 月 21 日）において開催されたシンポジウム「新日系カナダ文学の動向」で、「ヒロミ・ゴトーの *Chorus of Mushrooms* にみるグローカリズム」を発表した。移民作家が大活躍する今日のカナダ文学界において、本発表が示した分析法は他の移民作家にも通じ、今後この方法を用いた作品分析が進むとの好評を得た。

Hiromi Goto（1966－）の草分け的小説 *Chorus of Mushrooms*（『キノコの合唱』）（1994）は、カナダ文学おける identity politics（多元的で複雑な社会において，個人や集団が自分の帰属性・同一性を模索する試み）の声が声高に叫ばれていた 90 年代に出版された。本小説は、第二次世界大戦中と戦後の日系カナダ人の強制収用以後の日本からの移住者の体験を探った最初の日系カナダ小説である。またカナダに移民してからの体験をもとに、グローバルなものとローカルなものを融合させた小説作法を取っている。本作品は、多言語、出自の異なる登場人物、他国の文化、強い批判的な政治的発言などをテキストの中に集めることによって、ローカル色の強い背景と歴史的な遺産の中により広いグローバル的コンテクストを引っ張ってきている。

この小説の中心人物は、二人の日系カナダ人である。85 歳の移住者ナオエとカナダ生まれの孫娘ミュリエル/ムラサキである。ナオエは一見したところ、よく登場する、国を出た不幸な年老いた移住者像を反映しているかのように見える。新しい国に同化できず、祖国に釘づけになっている。娘の家族とカナダのプレーリーに移住してきたナオエは、新しい住処に満足していない。しかし、ゴトーの小説は、一般の移民物語から逸脱している。ナオエは英語どころか、カナダのもう一つの公用語であるフランス語までテレビから習得している。彼女が日本語を話すのは、主義主張からであり、同化主義者の娘ケイコに対抗するためである。そこで、ゴトーは翻訳なしの英語のアルファベットに置き換えた日本語を作品の中で用いることによって、また、読者に「外国」語をたやすく理解させる用語解説を付けることを拒否することによって、言語とコミュニケーションの考えを一層複雑化させていく。物語の中では、耳慣れない言葉の理解しがたさを一層強調するために、漢字やひらがなが使用されている。そうすることによって、ゴトーは、言語と文化の一つの舞台から別の舞台への移動を狙っており、かつまた、「外国語」（この場合、日本語）をその土地の言語に「翻訳」するよう求める統一化の力に積極的に抵抗しているのである。読者は、ページの中に、理解できない表現で、グローカルなものがあることを認識させられる。移住者は、移住とともに出会ったその国の文化と言語、つまり新しいローカルなものが優先的に受け取られ、実践されるべきだとせっつかれ、要求されるが、ゴトーは英語に特権（付加価値）を与えないことによって、この要請に活発に挑戦し、粉砕することを選択してきた。

グローカル性のさらなる面は、ゴトーの日本の昔話の使用に表れている。イザナミとイザナギの創世神話、一寸法師や山姥のような有名な昔話の主人公など昔ながらの伝説的な神話に言及しながら、移民作家の祖国へのノスタルジアを見せている。しかし、ゴトーは伝説的なものの単純な移し替えをここでも試みない。いち早く、伝統的な日本の昔話を根本的に書き換えてしまう。昔から伝えられている説話も、新しい世界に入ってくると、新しい文化の影響を受けるということである。男性中心の創世神話の世界は性差がもっとぼやけたものに置き換えられる。水の滴が落ちて日本列島になる代わりに、イザナミの指は、一層同性愛的なしぐさで水に浸かる。一寸法師は、美しい若い女を救うために鬼を打ち負かすが、二人の結婚後は、一寸法師は暴力夫に様変わりする。この美しい女主人公は、一寸法師のこの変貌振りをひどく嫌い、元の小さい体に一寸法師を戻し、足で踏み潰してしまう。

このように、ゴトーはいかなる文化の「真正さ」を表現することに関心がない。西洋的フェミニストとしてのゴトーの日本の昔話の修正もまた、グローバルな世界でローカルなものがグローカルな物へと変容した表れである。物語というものは、時空、文化を超えて行くにつれ、絶えず変化するもの、とゴトーは信じている。

『きのこの合唱』は意識的な政治活動から生まれた作品である。この作品は、アジアそのものであれ、移民の経験であれ「アジア系移民者の経験」と解釈されていたものに挑戦し、グローカル性という視点から、新しい解釈を提供したものである。

（３）今後の展望

日系カナダ文学およびアジア系カナダ文学の権威である Simon Fraser 大学の Roy Miki 教授は、インタビューで、「グローバル化時代における文学の状況を考えるとき、グローバル化は新しい形のローカリズムを生み、中国系カナダ人作家 Larissa Lai（1967－）の、*Salt Fish Girl*（2002）にその例を見ることができる」と指摘した。そして、「グローバル化による地球規模の緊張感が高まっている今日の状況の中で、植民地の歴史の負の遺産である今日の不平等さを認識させ、ローカルなものとグローバルなものが非暴力の形で共存し、想像力が新たな民主的統治を作り出す文化的枠組みの形成を呼びかけるライの小説は、文学の倫理的力を具現したものとして賞賛に値する」、と語る。昨今のグローバルなものとローカルなものが対立する中で、この「民主的統治を作り出す文化的枠組み」を探るライの手法こそ、新しい理念「グローカル」性に繋がるものと私は分析する。今後この日本発の分析法を用いて文学を分析する方法が広がっていくものと思われる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① 佐藤アヤ子　「カナダ先住民文学にみる〈グローカル性〉」　『PRIME』30 号に掲載決定　2009 年 9 月発行　明治学院大学国際平和研究所発行　査読無

② 佐藤アヤ子　「ヒロミ・ゴトーの *Chorus of Mushrooms* にみるグローカリズム」『カナダ文学研究』17 号に掲載決定 2009 年 12 月発行　日本カナダ文学会発行　査読有

〔学会発表〕（計２件）

① 佐藤アヤ子　「カナダ先住民文学にみる〈グローカル性〉」　明治学院大学国際平和研究所主催シンポジウム「グローバル化と多民族共生」にパネリストとして参加　2009 年１月 31 日　明治学院大学において

② 佐藤アヤ子　「ヒロミ・ゴトーの *Chorus of Mushrooms* にみるグローカリズム」第２７回日本カナダ文学会年次研究大会シンポジウム「新日系カナダ文学の動向」にパネリストとして参加 2009 年 6 月 21 日　拓殖大学において

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕

６．研究組織

(1)研究代表者

佐藤　アヤ子（SATO AYAKO）

明治学院大学・教養教育センター・教授

研究者番号：70139468

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし